

片山文保先生 略歴



<学歴>

昭和 49 年 3 月

應義塾大学 文学部 フランス文学専攻 卒業 文学士

昭和 53 年 3 月

慶應義塾大学大学院 文学研究科 フランス文学
修士課程修了 文学修士 (仏文学)

平成 元年 3 月

フランス国立ニース大学 哲学・思想史科 博士
課程修了 哲学博士

<職歴>

平成 11 年 4 月～

明星大学 一般教育 外国語 助教授 (平成 14 年
3 月まで)

平成 14 年 4 月 明星大学 一般教育 外国語 教授 (平成 22 年 3 月まで)

平成 22 年 4 月 明星大学 人文学部 全学共通教育 教授 (平成 30 年 3 月まで)

平成 30 年 4 月 明星大学 教育学部 教育学科 教授

<学会における活動等>

所属学会

昭和 62 年 日本フランス語フランス文学会 (平成 19 年まで)

平成 元年 6 月 実存思想協会 (現在に至る)

平成 元年 6 月 比較思想学会 (現在に至る)

平成 13 年 11 月 日本ラカン協会 (現在に至る)

<教育研究業績>

[研究分野]

哲学・思想、精神分析

[研究内容のキーワード]

フランス現代思想、精神分析、フロイト、ラカン

[教育方法の実践例]

総合的なフランス語教育の試み。平成 16 年 4 月より実施。「文法テキストによる学習 + 視聴覚教材と教員の解説による文化一般の理解 + CALL による語学練習」という、三本の柱による「総合フランス学」の構築である。文化一般の理解においては、視聴覚方

式の他に、夏期休暇に小説等の読書をさせることもプランに入れる（例えば、平成 16～18 年度にはラディゲ作『肉体の悪魔』について読後感想文を提出させ、発表会も実施した）。

<訳書>

1. アンコール（ジャック・ラカン著 共訳書 講談社） 平成 31 年 4 月
2. テレヴィジョン（ジャック・ラカン著 共訳書 改訳改版 講談社学術文庫） 平成 28 年 12 月
3. その他 テレヴィジョン（ジャック・ラカン著 共訳書 青土社） 平成 4 年

<学術論文>

1. Sur *Matière et Mémoire* de Bergson 単著 昭和 57 年 D.E.A. 論文（フランス国立ニース大学）
2. Corps, Regard et Réalité 単著 昭和 63 年 酒田短期大学研究年報 no. 1
3. Le Corps et le Monde 単著 平成 1 年 博士論文（フランス国立ニース大学）
4. 「実存世界」, 「私」, 身体 単著 平成 2 年 慶応義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学 no. 11
5. 世界としての身体とメルロ＝ポンティの「肉」 単著 平成 2 年 日本フランス語フランス文学会編『フランス語フランス文学研究』no. 57
6. 自己組織体としての世界 単著 平成 2 年 実存思想協会編『ハイデッガーとヘーゲル』以文社
7. 実存世界の解体 単著 平成 3 年 慶応義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学 no. 13
8. ジャック・ラカンの「主体」について 単著 平成 6 年 日本フランス語フランス文学会編『フランス語フランス文学研究』no. 65
9. ラカン『テレヴィジョン』の文体をめぐって 単著 平成 6 年 『imago』臨時増刊総特集号 青土社
10. ジャック・ラカンの「死」について 単著 平成 7 年 日本フランス語フランス文学会編『フランス語フランス文学研究』no. 67
11. ジャック・ラカンの「死」について (2) 単著 平成 8 年 日本フランス語フランス文学会編『フランス語フランス文学研究』no. 69
12. ジャック・ラカンの「死」について (3) 単著 平成 9 年 日本フランス語フランス文学会編『フランス語フランス文学研究』no. 71
13. ベルクソンの「精神」と他者 単著 平成 10 年 松蔭女子短期大学紀要 no. 13
14. ジャック・ラカンの「死」について (4) 単著 平成 10 年 日本フランス語フランス文学会編『フランス語フランス文学研究』no. 73
15. 「X には心がある」とはどういう意味か 単著 平成 10 年 松蔭女子短期大学紀要 no. 14
16. ジャック・ラカンの「死」について (5) 単著 平成 11 年 日本フランス語フランス文学会編『フランス語フランス文学研究』no. 75

17. ジャック・ラカンの「死」について (6) 単著 平成 12 年 日本フランス語フランス文学会編『フランス語フランス文学研究』no. 77
18. 主体と中枢 単著 平成 12 年 明星大学研究紀要 - 人文学部 - no. 36
19. 「主体」と絶対現勢 単著 平成 13 年 明星大学研究紀要 - 人文学部 - no. 37
20. ジャック・ラカンの「死」について (8) 単著 平成 14 年 日本フランス語フランス文学会編『フランス語フランス文学研究』no. 81
21. パラドックスと構造 単著 平成 14 年 日本ラカン協会編『I.R.S. —ジャック・ラカン研究—』no. 1
22. 主体と「一」 単著 平成 14 年 明星大学人文学部研究紀要 no. 38
23. 構造と反復 単著 平成 15 年 日本ラカン協会編『I.R.S. —ジャック・ラカン研究—』no. 2
24. 芥川龍之介「芋粥」の構造——芥川をラカンのように読む—— 単著 平成 16 年 明星大学研究紀要・人文学部 no. 40
25. 芥川龍之介「好色」の構造——芥川をラカンのように読む (2) —— 単著 平成 17 年 3 月 明星大学研究紀要・人文学部 no. 41
26. ラカンの「ラス・メニーナス」論 単著 平成 18 年 3 月 明星大学人文学部研究紀要 no. 42
27. 絵画と構造—ラカンの『ラス・メニーナス』論をめぐって— 単著 平成 18 年 8 月 日本ラカン協会編『I.R.S.- ジャック・ラカン』no. 5
28. 芥川龍之介とラカンの「構造」 単著 平成 19 年 3 月 比較思想学会編『比較思想研究』no. 33
29. 芥川龍之介「地獄変」の構造—芥川をラカンのように読む (3) 単著 平成 21 年 3 月 明星大学人文学部研究紀要 no. 45
30. 機知と他者——フロイト・ラカンの機知論について 単著 平成 24 年 3 月 明星大学研究紀要—人文学部 no. 48
31. 自我と欲動 単著 平成 27 年 3 月 明星大学研究紀要 - 人文学部 no. 51
32. 享楽の彼岸——ラカン『アンコール』を読む 単著 令和 2 年 3 月 明星大学全学共通教育研究紀要 no. 2
33. S_1 について——ラカン『アンコール』を読む (2) 単著 令和 3 年 3 月 明星大学全学共通教育研究紀要 no. 3

<学会発表>

1. メルロ＝ポンティの「肉」と、世界としての身体 (日本フランス語フランス文学会) 平成元年
2. 身体と自己組織体としての世界 (日本比較思想学会) 平成 2 年
3. ジャック・ラカンの「主体」について (日本フランス語フランス文学会) 平成 6 年
4. ジャック・ラカンの「死」について (日本フランス語フランス文学会) 平成 7 年
5. ジャック・ラカンの「死」について (2) (日本フランス語フランス文学会) 平成 8 年
6. ジャック・ラカンの「死」について (3) (日本フランス語フランス文学会) 平成 9 年
7. ジャック・ラカンの「死」について (4) (日本フランス語フランス文学会) 平成 10 年

8. ジャック・ラカンの「死」について (5) (日本フランス語フランス文学会) 平成 11 年
 9. ジャック・ラカンの「死」について (6) (日本フランス語フランス文学会) 平成 12 年
 10. ジャック・ラカンの「死」について (7) (日本フランス語フランス文学会) 平成 13 年
 11. ジャック・ラカンの「死」について (8) (日本フランス語フランス文学会) 平成 14 年
 12. ジャック・ラカンの「死」について (9) (日本フランス語フランス文学会) 平成 15 年
 13. ジャック・ラカンの「死」について (10) (日本フランス語フランス文学会) 平成 16 年
 14. ジャック・ラカンの「死」について (11) (日本フランス語フランス文学会) 平成 17 年
 15. 芥川龍之介とラカンの「構造」(比較思想学会) 平成 18 年
 16. フロイト著『機知』について(比較思想学会) 平成 23 年
- 以上

片山先生のご定年に寄せて

林 伸一郎

片山先生と本学で同僚となってから、先生ご自身について親しくお話する機会はなかったが、ご定年のこの機会に、先生の留学時代について、特に文学研究から哲学研究へ、さらにラカンとの邂逅へとつながる「一本の道筋」について、貴重なお話をうかがうことができた。ここではそれを紹介して、先生に贈る言葉としたい。

林：片山先生は、略歴によれば、学部から修士まではフランス文学を専攻しておられたようですが、どういう経緯で哲学あるいは精神分析に専門分野を変更されたのですか？

片山：高校生の頃から、ボードレールやヴェルレーヌなどのフランス象徴派の詩人に傾倒していたことから、大学は迷いなく仏文科に進んだのですが、修士論文でランボーを扱いながら迷いが現れ、修士修了後も、自分は文学には向いていないのではないかという疑問を持ったままフランスに留学したのです。

留学先のニース大学では近代文学科に籍を置き、ランボー研究の世界的な権威だったジャン・リッシュ教授の指導を受けましたが、日が経つにつれて迷いが募り、あるとき、ふと思立って、学部時代に読み始めて放り出したままになっていたベルクソンの『意識の直接与件について』を、また始めから読み始めたのです。学部時代には何度挑戦しても第一章しか読み進めなかったのですが、この時には、どういうわけか、そのまま、すうっと最後まで読み通せたのです。ベルクソンの文体がとても心地よく感じられました。

それで指導教授に相談したところ、ベルクソンは文学の分野で扱う人も珍しくはないが、本格的にやろうというならやはり哲学科に移籍した方が良いと言われ、哲学・思想史科に移ったのです。大学院レベルで文学から哲学に移籍するというのは、おそらく日本だと難しいと思いますが、フランスは受け入れ側の指導教授のサインひとつで出来るのです。とにかく本人の意向を第一に尊重してくれるのです。

そういうわけで、哲学科でベルクソン、メルロ＝ポンティ、大森荘蔵を中心にした心身問題をテーマに研究を始めたのですが、なかなか自分自身のテーマが現れず、これも苦労しました。しかし、怠惰な性分もあり、予想外に時間はかかりましたが、最終的に「中枢化的組織化」という自前の概念が実を結び、論文提出に漕ぎ着けることが出来ました。これは、チャン・デュック・タオが『現象学と弁証法的唯物論』において展開している動物行動の発展の具体例をタオとは別の観点から読み替えたものです。タオはそれらの具体例を弁証法的発展を論証するものとして示しているのですが、わたしはそれら具体例を、

そのままそっくり「中枢化的組織化」の運動として読み替えたのです。この中枢化的組織化というのは、簡単に言うと、バラバラな継起でしかなかった行動が、この継起水準を越える新たな上位水準に中枢を持つことによって有機的な繋がりの中に組織化されるという運動のことです。この運動は一度で終わるものではなく、新たに生じた中枢自体がひとつの継起水準を成すのであり、この水準に対する更に新たな上位中枢の現れによって新たな組織化が繰り返されることになります。「中枢」という語を使ったのは、この論法が動物行動学だけでなく、神経組織の発展にも使えるからです。

林：ラカンの研究はその後にされたのですね。すると、その「中枢化的組織化」という概念とラカンの精神分析理論とはなにか繋がりがあるのでしょうか？

片山：ラカンの研究は、帰国後に、実は友人から翻訳の誘いを受けて始めたものです。それまで、フロイトはある程度見ていましたが、ラカンはまったく初めてでした。しかし、始めてみて気がついたのですが、フロイト・ラカンには「組織化中枢」の概念が明白にあるのです。フロイトについてよく言われるファルス中心主義、ラカンで言えば第一のシニフィアン S_1 です。つまり、これは事後的な自覚ですが、自分がこれまでやって来たことには、その切っ掛けが自前であるにせよ、外来であるにせよ（自前と見えるものも実は外来でしょうが）、一本の道筋が見えるということです。結局、それは誰においても起きることでしょうが、切っ掛けというのは、人生における人や事物との数知れぬ可能的な出逢いのうちで、自分にとって意味を帯びる現実的な出逢いのこと、ラカンが「邂逅」と呼ぶところの「運命」との出逢いのことで、これらの邂逅が自ずと一本の道筋を後に残すのでしょうかね。

林：今日は貴重なお話、どうも有り難うございました。

先生はこうして 20 世紀最後の年に、フランス現代思想の、特に精神分析学を独自に深めた哲学者ジャック・ラカンの専門家として明星大学に着任された。本学では全学共通教育委員会に所属し、委員長も務められた。その間、哲学者らしく見透しのよい、緻密な思考によって問題を明らかにして対処されるとともに、文学者のように機微に通じた委員長として委員会をまとめ、運営された。教育に関しては、フランス語と哲学関係の講義を担当されたが、特筆すべきは、所属する学生を持たない全学共通教育にあって、先生は一人一人の学生を尊重されるその指導を通して、他大学の哲学専攻の大学院へ学生を送り出されもしたということである。我々の具体的な経験から出発して、その経験を成立させている機制をラカンやフロイトの思想を通して明らかにする、先生の哲学のスタイルが学生たちを惹きつけていた証左であろう。

文学研究から哲学研究へと「運命」によって導かれた先生のご業績の中に芥川龍之介の作品をラカンのように解釈するものがある。その中で先生は、芥川の作品中のある人物の分析を通して、そこに「この世では」決して満たされることのない根源的欲望に駆動され、「この世で」はかない価値を求め続けざるをえない人間の姿を剔出され、そのような欲望を「人間を根源から、人間として、生かしている宿命」と呼ばれている。先生はこの 3 月

をもって大学という場から解放されるが、この「宿命」からは先生ご自身も逃れられず、先生はこれからもラカンの思想を介して「人間」を問う御研究に邁進されることになろう。どうかお元気で、またいつかお話の続きをお聞かせください。